

禅の友

Zen no Tomo

11

November 2024





ご本山だより
大本山永平寺【雪囲い作務】

ゆきがこ

ざむ

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



十一月の初旬は、紅葉がもっとも見ごたえがある時期といってもよいでしょう。境内の木々や永平寺を囲む山々は赤や黄色に色づきます。

しかし、見頃だった紅葉がいつの間にか落ち、下旬のころには樹々の枝が露わになっていきます。その頃には、朝晩は吐く息も白くなり、水を使った時などには手がかじかむこともありま

す。本格的な冬の訪れを間近に控え、山内では随所で様々な備えをしています。その一つが伽藍がらんに施す雪囲いです。各堂宇どううに木や鉄でできた骨組みを巡らせ、その上に竹簾やビニールをかぶせていきます。それらで囲い込むことで、堂内や回廊に雪が入りこまないようにするのです。

竹簾を山内の各所に運び、堂宇を隙間なく覆っていく作業は想像以上に大変な作業です。近年は以前よりも雪の

降る量が少なくなっています。その為此れほどの準備をしなくてもよいのではないかと考える方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、時折大雪が降るのもまた近年の特徴です。令和四年には回廊の屋根よりも高く積もるほどの雪が降りました。いざという時の為にも、確実に準備をしておくことが大切なのです。

雪囲いが済むと、竹簾で覆われている回廊からは外の景色が見えなくなり、はつきりと見えるのは目の前の廊下と階段だけです。深山幽谷にて修行をしている雰囲気否が応でも増します。

次に外の景色が見えるようになるのは雪解けの時。すでに春の訪れが待ち遠しくなります。それまでの間、ただひたすらに廊下を歩き、階段を上り、坐禅をするのです。



ご本山だより 大本山總持寺【霜月總持寺】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一



世界的に異常気象に見舞われ日本各地でも高温注意情報や大気状態不安定によって今迄に経験がなかった様な豪雨災害が発生したのも地球沸騰時代の到来かと恐怖さえ感じます。

霜月十一月になり、ようやく過ごしやすくなつたようです。

さて御両尊御征忌と瑩山禪師七百回大遠忌慶讃法要も無事円成し、本来ならようやくここで落ち着くところではありますが、月末までは全国から大勢のご寺院さまと檀信徒の方々が總持寺に参詣に來られる予定となつております。

また、十一月五日は今から一三三年前（明治四十四年）に總持寺が鳳至郡門前町（現在の輪島市）から鶴見へ移転し、遷祖式が放光堂で盛大に行われた日です。

今年もご移転記念行持、第十回「つ

るみ夢ひろばin總持寺」が十一月三日（祝）の十時より十五時までの予定で開催されます。

参道でのバザールや三松閣での華道展、茶席、書道展、絵画展そして今回は大遠忌に因んで御移転パネル展や總持寺と輪島總持寺祖院の物品を震災復興の一助となればと販売いたします。

また、学校法人・總持学園が今年創立百周年を迎え、第六十回紫雲祭（学園祭）が去る十月二十六日（土）二十七日（日）に行われましたことをお知らせいたします。

總持寺山内では十一月十三日から十七日は「制中五則」の期間で、その最終日に「首座法戦式」が行われます。また、二十一日には開祖瑩山禪師の降誕会（誕生日）の法要が修行されます。この行持が終わると、年内最後の行持である臘八撰心を迎えるのです。

選・坊城俊樹

画眉鳥をどこまでも追ひ花野へと

長野県 森山 昌子

評 画眉鳥という鳥の囀りはまるで天使が歌を歌うようである。その声に誘われて花野へと迫って行く作者はあたかも少女の心を持って居るのである。それは時空を超えて彷徨う至福の時であり、夢の中の不思議なお伽噺なのかもしれない。

撫で捨つる思ひ出ずしり登山靴

静岡県 堤 千春

評 登山靴に籠められた思ひ出というものはどこまでも深淵で重たいものである。そこには青春の楽しい思ひ出や苦しかった時の思ひ出もある。いざその靴を捨てるといふことになった時それらの思ひ出がずっしりと心に浮かんでくる。それもまた青春の思ひ出。

◆ けっぱれの墨書の団扇使ひこむ

岩手県 阿部 恵子

◆ 盆座敷故人を偲ぶ靴五足

長崎県 崎田 定雄

◆ 青田波白鷺一羽睥睨す

兵庫県 待元 明子

◆ 石工の石真つ二つ星流る

島根県 金山 陽

◆ 送り火や少し太りてナスの牛

山口県 稲村 みどり

◆ 棚経の僧衣に透ける不惑の背

岡山県 角脇 隆子

◆ 桃の籠抱き単線を乗り替へる

大阪府 柏原 才子

◆ 大き網打ちてみたしや鱚雲

島根県 藤江 堯

◆ ポップコーンは大方空気ビール酌む

千葉県 長澤 きよみ

◆ ひとすすり昔をたぐる心太

宮城県 阿部 徳夫

選者吟

怪談を語る羅うるはしき

俊樹

作句小見

この怪談を語っている女性はとても美しく清楚な人であった。だからこそこの怪談は恐ろしかった。そしてこんな美しい唇から語られるからこそその怪談は恐ろしい。ましてやその嬬やかで美しい着物もまた美しければ美しいほど恐ろしい。

選・長澤 ちづ

盆飾り新小竹伐らず萱刈らず簡素化決め
しは去年よりのこと

静岡県 杉原 民子

評「伐らず」「刈らず」と否定形に詠われているが、

一昨年までは小竹を伐り萱を刈って盆飾りを調べていたということ。簡素化を決意したことへの思いの深さが、下の句の言外にこもる。暮らしの凜とした佇まいが一首に表れている。

朝顔の花ほどき初む庭に佇ち身の青むま
で風を吸うなり

鳥取県 徳本 義則

評 上の句の朝顔の様子から早朝であることが分かる。まだ明け初めたばかりなので、風も青みを帯びているという把握がうつくしい。朝顔も

きつと青色なのだろう。

◆ 選杖を繰り返し來し人生は吾の背後の一本の道

岐阜県 後藤 進

◆ 運河の橋のバイオリン弾きゆれながら余れる音は水にとどくか

北海道 菅原 三江子

◆ やわらかき蝗捉うる皺の掌に委ねるかたち不意に愛しき

兵庫県 前田 あつ子

◆ パリ五輪の選手の苦行プレツシャー才能なくて良かつたと妻

静岡県 末光 愛正

◆ 摘果する蜜柑の量に驚きぬ固き果実に猛暑を詰めて

埼玉県 荒井 巳喜雄

◆ 週二回ゴミの日のある日常に市民を意識す納税よりも

静岡県 小川 健治

◆ 青あおと水を湛えて守りいる一葉観音座す寺の池

愛知県 重野 宏美

◆ 袖口を粉まみれにし蕎麦を打つ背を流るる汗のつめたしす

愛知県 館 一子

◆ 日向水に足を洗ひし日は遙か母惚びつつ桶に水張る

北海道 加藤 智子

◆ わたくしが帰れば食欲増すと言ふ母の傍に巻き寿司を食ふ

熊本県 島田 佳可

選者誌

一心に羽繕いするカラス見つつわたしのこころが
しんとしてくる

ちづ

作歌小見

小川さんの作品、生活に密接したところで働く人々への感謝にもつながるようです。加藤さんの作品からは、日向水の盥で行水をした父の話を思い出しました。気候が穏やかで自然と共に暮らしていた良き時代でもありました。